

イワシ網・イリコ作り

『中島町誌』によると、由利のイワシ網・イリコ作りは昭和四（一九二九）年から始まり、戦争末期空襲の合間もつづき、戦後も活況を呈したとある。スミエさんは小娘のときからイリコ作りに参加していた。

「イワシ網・イリコ作りは、戦後も二神漁業組合自営部と二神島民の共同経営よのう。島民は男女合わせて三〇人が一組になって、全部で四つの組をこさえて、イリコを作ったんよう。漁期は毎年七月半ばから九月の終わりまでの七〇日間を「一楽」と言うてよの、組合と島民の歩合は四分六、その年によってちごたんじゃけど、賃は男衆おとこしが一人前、女子衆おなごしが八分、子どもは駄賃がもらえたんよのう。

それで「一楽」を終わって秋漁すつときの賃は、また別よのう。イワシ網の操業、イリコの製造販売の経費やら生活費をさつびいた出来高払いよう。

イワシ網の一日の始まりは、総員起こしの合図のラッパの音で起こされたんよな。戦前はほら貝吹きよったわい。東の空が白み始める午前四時頃よのう。みんな寝ぼけ眼で浜へ飛び出しちゃうよう。集合に間に合わなんたら、その日の賃はもらえんけえのう。



イワシは巾着網と地引網で取っちゃうんよう。雨降り時（梅雨）は潮順がようて、大漁つづきよう。朝起き抜けに取ることを「朝まじめ」、昼間を「日まじめ」、それに「夕まじめ」「夜まじめ」言うて、イワシがおつたら何べんでも取りに行きよったけえのう。

見晴らしのきく小由利の櫓に、イワシを探す山見の者がおつてよの。イワシの群れを見つけたら、すうぐに方角やら場所やらを手旗で知らせくるんよの。晩は懐中電灯を振って合図したけえ、合図を受けたら男衆は一斉に船を漕ぎ出しちよったわい」

参加していた中村さんは、重たい巾着網を引き上げる力自慢の胴打ちをしていた。

「イリコ作るんは女子衆の仕事じゃけえ。浜へ

出たら一番に釜立ての支度よの。イワシをいつからでもゆがけるように、釜場を掃除、焚き付けの薪束やらイワシをゆがくザル、桶に水を張って釜場に運んどくんよう。

sondeから、前の日に干して倉庫にしもちよつたイリコを出して、二、三時間ぐらい干すんよの。イリコは熱気があると腐るけえのう。日の当たる前の涼しい風で冷まして、完成品にしてから倉庫に取り込んだんよう。女子衆は、その合間に朝ご飯の支度やら、赤ん坊の世話をしちよつたわい。

大漁がつづいたらなあ、もうてんでこ舞いよう。沖から取って帰る男衆から「釜立てえ！」と声がかかったら、すうぐにオクドに薪をくべちよいて、船が浜に着いたら総出でイワシを釜場へ上げたんよう。イリコのできはイワシの鮮



度が一番大事じゃけえ。大漁ときは干場もムシロ、ザルもみんな取りやいっこよう。

よその組より、ちいともええもんこさえようやい、ちいとも楽しんで、早う作ろうわい言うてよの。ご飯食べる間、お茶を一杯飲む間を惜しんで、浜へ出たんよう。

sonde、よおーし、いっちょやつちやろわい。スミ姉には負けとれんわい、言いやいっこしてよの。肩にザル五〇枚やら薪の大束、イワシでずつしり重たい二杯ザルを担いで浜を走りまわつちやんよなあ。どうじゃ、うちにはかなわんじゃろう言うて、男顔負けの力比べをしちよつちやわい。

よその組には負けとれんでえ、うちも頑張ろうやい言うて、張り合いを持つとつたけえなあ。じゃけど、今日は日曜じゃの雨降りじゃの言うて、休むということはなかったけえなあ、体はえらかつたわい。けど、おもしろかつたわい。

漁業組合が重油焚きの自家発電をしてな。ラジオの放送をスピーカーで流してくれて、ニュースやら歌謡曲を聞きながら仕事ができたんで、能率が上がったんよう。生活物資や食料品は二神から組合が持つて来たけえ、なんちゃ困らんかつたけど、すうぐに井戸が枯れてしもたんで、困ったんよう。

大勢の人が共同で使うんじゃけえ、溜まるひまがなかったんよう。じゃから、夜中でも家の外から「水が溜まっとらい」と声がしたら、汲みに走って、釣瓶をガラガラいわして井戸の底をさらう

ようにして、ひしゃく一杯の水も汲んだんじゃけえ。

明神の井戸のうち二本が飲み水用じゃったんじゃが、大潮になると海水が混じって塩辛うて飲めなんだわい。もう一本は海軍が掘ったんじゃけど塩辛かったんで風呂、洗濯に使うちゃんよう。とうとう井戸が枯れたらよのう、伝馬船漕いで東の砂浜部落へ水汲みよのう」

砂浜の井戸は海軍が大きくして、島人と共同利用していたが、水が枯れることがなかった。砂浜の井戸のおかげで、みんなが助かった。

「イリコは三津浜、津和地、広島方面から業者が来て入札よう。商談が済んだら船に積み込むんじゃが、女子衆には、運ぶたんびに口にアメ玉をほうりこんでくれよったわい。

それになあ。干しとるイリコがムシロからこぼれ落ちちよると、小娘は捨ててもかまわんかったけえ。みんな小さなヒタミ(竹カゴ)に貯めちよいて、三津から島を巡って来ちよった行商船の果物、モモ、ナシじゃの好きなんと交換できたんよう。それが小娘時分の楽しみよう。うれしかったわい」

「イワシ網の人は長屋住まいよう。一部屋六畳ぐらいで、親子が押し合いへし合いしておったわい。その時分どこの家でも子どもが多かったけえ、子が二、三人なら、おまんとこには子がおらんのかい言われよったんよう。

夏の瀬戸内の夕風は宵の口にかけて風がピタリと止まり、ムシムシ暑い。

「そうじゃけえ、夫婦もんは子どもの寝相を直してよの、伝馬船漕いで松原へ行きよったわい。松の枝から蚊帳を張って、伝馬船の中で寝よったんよう。そんなら波の音ぎりで静かじゃし、涼しからう」

イワシ網は由利に行けば食べられるという魅力と、一つのことをみんなで力を合わせてする喜びがあった。男衆の「釜たて！」女衆の「あいよー」。あ・うんの呼吸で仕事にかかり、女子衆は気心知れた者同士、ボンボン言い合いながらそれを楽しんでいた。

